

〔論 文〕

ジョージ・バークベックの思想

藤 野 寛 之

I はじめに

18世紀末、スコットランドのグラスゴーで開始された、技術職人のための教育クラスの発達は、職工講習所 (Mechanics' Institute) 運動と呼ばれた¹⁾。その中心となったのは、グラスゴーのアンダーソン学院 (後のグラスゴー王立技術カレッジ) の教授であった医学博士ジョージ・バークベック (George Birkbeck, 1776-1841) であり、彼がこの学院で始めた科学技術の初歩知識クラスが、イギリスにおけるこの運動の先駆であった。本稿では、その後に「ロンドン職工講習所 (London Mechanics' Institution)」を生み、これをモデルとする全国各地の取り組みが1830年代から19世紀後半にかけてイギリス全土に広がり、さらにはアメリカその他の諸国に普及したいきさつを、バークベックの思想の解明とともに取りあげて究明するものである。これは、教室形式での成人教育がいかに定着していったかを考える手がかりともなりうるものである。バークベックとその職工講習所については、リヴァプール大学の教育社会学を専攻するトーマス・ケリー (Thomas Kelly) の研究、その他が既に刊行されているが、本研究は、バークベックの思想の中核をなした、市民、特に職工たちへの「一般的な初等知識」の普及がいかに産業革命期のイギリスに適合していたかを考察の中心としている。

II 生い立ち

ジョージ・バークベックは、1776年1月10日にイングランド北部、ヨークシャー州のセトルで生まれた。父親は、この地で羊毛加工工場を経営しており、さらに北部のウェストモーラ

ンド出身の資産家であって、両親はともに熱心なクエーカー (Quaker) 教徒であった²⁾。こうした出生の背景は、バークベックの生涯に根本的な影響をもたらしていた。母親は彼が14歳のときに亡くなったが、6歳年上の兄が家業を継ぎ、次男であったジョージも両親の庇護のもとに成長した。この時期、ジェームズ・ワット (James Watt) の蒸気機関、カートライト (Edmund Cartwright) の織物機器の発明は、産業革命を支えたイングランド北部の羊毛産業を発達³⁾させており、父親の工場で育ったバークベックの「技術による進歩」の思想の根底を作りあげていた、と同時に、母親からのクエーカー教徒の信仰は、博愛の理想をも彼に植えつけていた⁴⁾。さらに、セトルの地で事業を広げていた兄は、その後も生涯にわたって弟を財政的に支援した。

プロテスタント教徒ではあるが、職工の子であったジョージ・フォックス (George Fox) が17世紀の半ばに形式的な教会でなく、内面の信仰を重視して組織した「フレンズ会 (=クエーカー教徒)」は、イギリス国教会からの激しい迫害を受けていた⁵⁾。とはいえ、特に北部イングランドおよびスコットランドの中下層階級に多くの信者を得ていた。クエーカー教徒をイングランドの「名門」大学 (オックスフォードとケンブリッジ他) は受け入れなかった。さらに、クエーカー教徒の理想である「他への奉仕」を貫く職業として考えられていたのは、法律か聖職か医学であった。バークベックは医学を選んだ。

18世紀「スコットランド・ルネサンス」の中心であったエディンバラ大学は、バークベックが18歳で入学した時には、その絶頂期を迎えていた。1437年にジェームズ四世 (James IV) に

よりスコットランド王国の首都となっていたエディンバラは、1707年にイングランドとの「合同法」により議会を失って、政治的には衰退した。しかし、18世紀には「文化の中心地」として復活していた。この都市は、ウィスキーの蒸留のほか、良質な紙の生産とそれによる出版で知られ、出版界ではコンスタブル (Archibald Constable) などが活躍していた。18世紀に開かれた「新市街」は、多数の文化人で活気を呈していた。1583年創設のエディンバラ大学は、1789年に新校舎の建設を始め、1801年によく完成していた。医学部の創設は1726年であった。世紀の初めには8名の教授と300名の学生がおり、法学部、医学部、神学部が知られていた⁶⁾。そこで貴族出身でない教師のもと、学生たちの多くもまた、そうした反抗精神に培われていた。彼が入学したころのこの大学には、教師としては、化学のジョセフ・ブラック (Joseph Black)、数学のジョン・プレイフェア (John Playfair)、道徳哲学のドゥガルド・スチュアート (Dugald Stewart)、解剖学のアレクサンダー・モンロー (Alexander Monroe) がおり、いずれもが時代の先端をいく研究で知られていた⁷⁾。この大学は専門の領域にとらわれずに、学際間の交流が実現していた。まだ小規模の大学であり、さらに当時の地方大学の医学は実務を中心として、インターンの時期は重視していたものの、学生はかなり自由に学んでいた。バークベックの人文学にもわたる広い知識の基盤はこの大学で身につけられた。18世紀末のエディンバラ大学の学生とその生活について、伝記作家のロックハート (John Gibson Lockhart) は次のように記している、「学生のほとんどは……きわめて貧しく、粗末な服装で、屋根裏部屋に住み、お粥とニンジンだけで暮らしていた⁸⁾」。

バークベックの同時期の学生たちの顔ぶれも錚々たるものであり、これも彼のその後の教育者としての成功を支えていた。その代表は、後に革新派の政治家として知られた下院議員のヘンリー・ブルーム (Henry Peter Brougham)

であった⁹⁾。二人は生涯にわたる親友として互いの思想と家庭を支えあっていた。ブルームの他には、いずれも後に政治家として知られた、ヘンリー・ベティ (Henry Petty)、チャールズ・スチュアート (Charles Stewart)、フランシス・ホーナー (Francis Horner)、マウントスチュアート・エルフィンストン (Mountstuart Elphinstone)、『エディンバラ評論 (*Edinburgh Review*)』の創始者である、法律家のフランシス・ジェフレイ (Francis Jeffrey) と評論家のシドニー・スミス (Sydney Smith)、学者および文人では、化学者のトーマス・トムソン (Thomas Thomson)、物理学者のデイヴィッド・ブリュースター (David Brewster)、哲学者ジェームズ・ミル (James Mill)、法学者ヘンリー・コックバーン (Henry Thomas Cockburn)、作家のウォルター・スコット (Walter Scott) がいた。医学部の同級生のなかには、後に言語学者として知られるシソーラス言語辞典のピーター・マーク・ロジェ (Peter Mark Roget)、後に物理学者として名をなしたトーマス・ヤング (Thomas Young) もいた¹⁰⁾。バークベックは、大学のほか、エディンバラ王立医学協会の会員となっており、1797-98年にはすでにその下部組織となった自然史協会の会長でもあった。議事進行役としての彼の力量は、誰もが認めるところであった。専門は異なっていたものの、バークベックとヘンリー・ブルームはいくつかの教室では「同級生」であり、ブルームのほうは王立協会に論文を寄稿するほどの科学の信奉者であり、バークベックのほうは、ブルームの影響で、進歩主義傾向の「ホイッグ党」の熱心な支持者となっていた。

Ⅲ アンダーソン学院期

エディンバラ大学を卒業した1799年11月、バークベックはグラスゴーのアンダーソン学院の教授に任命された。グラスゴー大学の東洋言語学の主任教授ジョン・アンダーソン (John Anderson) の遺言により1796年に設立されて

Mar. 2025

ジョージ・パークベックの思想

いたアンダーソン学院は、市民にとっての「一般教養」の学校であった¹¹⁾。1726年生まれのア
ンダーソンは、1745年にグラスゴー大学で言語
学を学び、1754年より母校グラスゴー大学の教
授となった。学生にヘブライ語を教えるのが本
務であったが、それは「自然哲学」を教えるた
めの踏み石であった。彼は「自然哲学」の科目
を1757年から死の年の1796年まで受け持った。
彼の手によるこの科目は実務を重視してはいた
が、本質的には「物理学」であった。この科目に
彼は正規の学生だけでなく、一般市民をも歓迎
した。学期中の火曜日と木曜日の朝と夕方、彼
は1ポンドの受講料で「ほぼすべての階層、年
齢、職業の町の人たち」に向けてこの科目を開
講していた。これはまさに「科学の知識を広げ
る」努力であって、パークベックがその後に開
設する「職工クラス」の萌芽であった。この科
目は、後の「職工クラス」の核となった科目で
あり、それは、産業革命により小市場町から一
大商業・産業都市へと成長していたグラスゴー
に適していた。スコットランド中部の都市グラ
スゴーの出現は6世紀と歴史は古かったが、こ
こが海港都市として発展したのは、18世紀から
であり、海に通ずるクライド川は、1768年に掘
削され、グラスゴーは大規模な港として繁栄し
ていた。「産業革命」のための主要な貿易港と
して、ここは、造船、機械、織物などの主産地とラ
ナークシャーの炭鉱地帯を背後に持ち、産業都
市として急速に発展しており、製造業の基本知
識の職人への伝授の場として恰好の地であっ
た¹²⁾。明治期に日本から若者がウィスキーの蒸
留法を学びに行ったのはグラスゴーであった。

アンダーソンは、1796年1月に遺言書を書き
終えて、その数日後に亡くなった。彼の遺言に
は「人類と科学の振興に資する」市民のための
「アンダーソン学院」の設立を書き残していた。
この施設が開設すべきクラスとして、彼はグラ
スゴー市民に「商業、農業、技術（金属・ガラス・
木材職人）、医学、法律、聖職、自然哲学」の知
識を伝授することを記していた。さらに、アン
ダーソンは、教職を担当する者は婦人のための

「物理学コース」を受け持つことを義務付けて
いた¹³⁾。

学院の理事会が決めた最初の教師はトーマ
ス・ガーネット (Thomas Garnett) 博士であっ
た。リヴァプールで医学を学んでいたガーネッ
トは、アメリカへの渡航を計画していたさい
に、友人の勧めでアンダーソン学院の職に応募
することとし、1796年に200ポンドの年俸で赴
任した。アンダーソン学院と同じ趣旨で設立さ
れたロンドンの王立実験哲学・技術・化学学院
の初代教授に転身するためにアンダーソン学院
を辞職したガーネットの後を継いだのがジョー
ジ・パークベックであった¹⁴⁾。パークベックは、
エディンバラ大学の先輩たちに勧められてこ
の職に応募したが、自然科学全般に対する彼の
関心が歓迎され、1799年にグラスゴーに赴いた
パークベックは、聴衆を引きこむ話術で知られ
るようになった。

1) 職工等の技術者に科学技術の基本知識を
授けること、2) 授業は無料とすること、といっ
た、この学院での彼の方針が評判となってい
た。それとともに、彼が当初から目的として
いた「実際の器具を使った」実験を主眼とした「分
かりやすい」講義が受け入れられたのである。
「自然哲学」および「技術」の「職工」たちのクラ
スは、1800年12月に開始された。参加しやすい
ように、最初は土曜日の夕方の開講であった。
当初は75名であった聴講生は、二回目の講義
では200名、三回目には300名、四回目には500
名と増えていき、パークベックの評価は定まっ
た¹⁵⁾。彼は講義を「地理学」、「天文学」にまで拡
大し、午前のコースも開講した。しかし、1803
年に学院の理事会はこの課程を有料とすること
に決定、パークベックは反対したが、受け付け
られず、授業料の低減を交渉せざるをえなかつ
た。このコースはもともと、実物の機械や道具
類の入手費用をパークベックが自費で賄って
ようやく成り立っていたのであった。1804年6
月、パークベックは理事会に対して辞任の意向
を表明した。この書簡には辞職する理由が書か
れていなかったが、彼の意思が固いと見た理事

会は彼の願いを受け入れた¹⁶⁾。学院の「職工クラス」は2歳年下の後輩の化学者アンドリュー・ウア (Andrew Ure) 博士が受け継いだ。

IV 充電期

グラスゴーを去ったパークベックは、1804年の秋から、バーミンガム、リヴァプール、ハルで雇われ、講師として化学の市民講座を受け持った。しかし、結婚が迫っていたこともあって、さらに安定した職を求めねばならなかった¹⁷⁾。母方のいとこのレイチェル・ブレイスウェイトは、すでに1791年にバーミンガムの銀行家のサミュエル・ロイドと結婚していたが、ロイド家もクエーカー教徒であったため、パークベックはしばしばロイド家を訪れていた。そのこともあって、サミュエルの妹カサリンと知り合い、1805年に婚約した。パークベックの父親が死去し、結婚は1806年の5月となった。新妻とともにロンドンに移って開業医を目指す、カサリンは翌年3月に男子を出産した9日後に亡くなった¹⁸⁾。不幸な事態が重なったが、クエーカー教徒の精神を取り戻し、以後の生涯を社会への奉仕に尽くす決意を固めた。ロンドンのスラム地区のなかにあったアルダースゲイト地区の診療所に勤務して、貧しい市民のための医療に努めるかたわら、ロンドン医学協会、ロンドン外科学協会の会員となり、さらには、地質学協会、天文学協会、気象学協会に参加して、気象学協会では1823年にその会長にまでなっていた。こうした各種団体はいずれも市民に向けた講演会を開催しており、パークベックはそこでの講師を引き受けていた。とりわけ彼が熱心だったのは、1805年に科学知識向上のために組織された「ロンドン学院 (London Institution)」に対してであり、ここは1万冊を超える図書館の蔵書の会員への開放を事業としていた。さらに、そこは市民向けの講演会や公開実験も開催しており、彼の関心はむしろそちらにあった。ここは、後の「ロンドン職工講習所」の先例となるものであった。彼は1812年よ

りこの事業に関わり、後にその事務局長を引き受けていた¹⁹⁾。エディンバラ大学時代からの親友ヘンリー・ブルームは、1810年には議員としてロンドンで暮らしており、パークベックの良き理解者となっていた。ロンドンのクエーカー教徒のサークルも彼の事業を支えるグループであった。妻を失った10年後の1817年、パークベックはリヴァプールの商人の娘アンナ・ガードナーと再婚した。アンナはクエーカー教徒ではなかったが、5人の子どもに恵まれた。そのこともあって、彼は落ちついて仕事に集中できるようになった。

V ロンドン職工講習所期

1823年、パークベックは彼の生涯において最大の関心事である労働者教育の中心をなし、いわゆる各地の職工講習所開設運動の引き金となった「ロンドン職工講習所」を設立した。職工のための教育の機は熟していた。第一に、産業界は技術の知識に秀でた職工をますます必要としていた。第二に、一般市民にも科学技術の関心が高まっていた。第三に、教育に対する要求が運動となって表面化した。第四に、政治・経済の改革に向かう労働者階級の意識の高まりがあった。さらに、パークベックはすでにグラスゴーで職工向けのクラスを成功させた経験を持っていた。「ロンドン職工講習所」の目的は「会員に対し、各人が従事している諸技術の原理、ならびに、さまざまな学問と有益な知識の分野に対する教育を提供すること」であり、その手段は以下のとおりであった。

1. 職工その他……によるわずかな年会費もしくは季節会費の支払いの義務。
2. 資金、図書、標本、器具、模型、設備の寄付。
3. 参考図書館、貸出図書館、閲覧室の設置。
4. 機械、模型、鉱物、自然史の博物館の開設。
5. 自然および実験哲学、機械工学の実務、

天文学、化学、文学および美術の講義の提供。

6. 算数、幾何、地質、三角法、および、透視図、建築、測量、航海術へのそれらの応用を教える初等教育の実施。
7. 実験室およびワークショップの併設²⁰⁾。

理事会にはバークベックのほかにブルームおよびジョシュア・ウォーカー (Joshua Walker) が連なり、この施設はモンクウェル通りのプレスビテリアン教会のチャペルを一時的に講義のために借り受け、1824年1月に正式に活動を開始した。1823年には最新の技術を紹介する雑誌『メカニックス・マガジン (Mechanics Magazine)』がジャーナリストのジョセフ・ロバートソン (Joseph Robertson) により刊行されており、機運は整っていたのであるが、先のグラスゴーでの実験的試みも広く知れ渡っていた。『メカニックス・マガジン』は「知識は力なり」というフランシス・ベーコン (Francis Bacon) の言葉を掲げ、実業界の先進国イングランドを全面的にアピールしていた。すでに1823年11月に「クラウン・アンド・アンカー」で開かれた講習所の公開講演会には2000名以上の市民が集まっていた²¹⁾。こうして、職業を持った市民のための基礎講座の開設と、それを支える図書室ならびに博物館と実験室の配備は、その後、イギリス各地に広まる多数の職工講習所のモデルとなった。

設立一年後の「ロンドン職工講習所」の年次報告によれば、初年度の活動は成功であった。会員は1000名に達し、寄付金は785ポンドに及び、図書の寄付も多かった²²⁾。1824年の夏、理事会は講義棟の建設を決議し、そのための募金活動を開始した。3700ポンドをかけた建物は1825年7月に完成した。開所式には王族も出席し、バークベックとブルームが記念講演を行った²³⁾。

会員数は1825年の末には2000名に達していた。講義内容も、政治経済学が加わるなど、次第に一般市民向けとなっていた。この施設が

1820年代の後期に一つの頂点に達したのは、1826年にブルームが創設した「有用知識普及協会」のおかげであった。この協会は市民の福祉と教育を推進するための一般団体であったが、ブルームのおかげで多数の政治家や知識人の賛同を得ていた。バークベックもこの協会を支持した一人であった。表向きは独立の組織であったが、「職工講習所」の支援団体であったことは明らかで、ここが市民を受講生として確保するうえで役立っていた。すなわち「有用知識 (Useful Knowledge)」とは、職業と生活のための基礎知識のことであり、機械の仕組みや社会のメカニズムを認識する技術であった²⁴⁾。

受講生の数には年により増減があったが、事業としてもっとも成功したのは付設された図書館であった。1826年には蔵書が2000冊足らずであったが、1829年末には4000冊に達しており、閲覧室は朝の10時から夜の10時まで開いていた。1830年にはロンドンの新聞6種を講読すると決定したため、利用者が急激に増加した。機械や器具の収集もこの時期に増加し、展示の姿も整った²⁵⁾。

VI 職工講習所の展開

1826年からバークベックの死去の1841年まで「ロンドン職工講習所」のモデルはイギリス各地に波及していった。特に、ロンドン郊外、北部イングランド (マンチェスター、リヴァプール、バーミンガム)、スコットランド (エディンバラ、グラスゴー)、海浜都市の各地でその勢いが目立っていた。それらは、産業革命を先導した場所であり、職工たちの学習意欲もかねてから旺盛であった。「ロンドン職工講習所」と同様の組織が、1824年には13ヶ所、1825年には70ヶ所、1826年までには全国で100の組織が出来ていた。その名称はそれぞれ異なっていたが、もっとも多い名称が「職工講習所 (Mechanics' Institute)」であったため、この現象は「職工講習所運動 (Mechanics' Institute Movement)」と呼ばれるに至った。

この勢いを支えていたヘンリー・ブルームが1825年に刊行したパンフレット『民衆教育についての实际的観察』²⁶⁾のなかで自身の活動を次のように述べていた、「暴君、事実上の悪政の主にとって……知識の広がり恐怖の対象でしかない……彼らはこれを本能的に知っており……光を恐れている。しかし、それを消し去ることができずただ呪うだけである。そうした呪いにもかかわらず、光は広がる」。

多数の「職工講習所」が設立されたものの、すべてが成功とは言えなかった。土地の製造業者が協力して教育組織を作ったヨークシャー州のキースレーの例があったのと同時に、小規模の図書館コレクションだけのケンダルの例もあった。各地の指導者には、勤勉な職工の育成を目指す者、もしくは、地方自治体の指導者の養成を狙っていた者もいたが、パークベックを代表とする大勢は、技術の基礎理論と（次第にはあったが）教養教育の教授を目指していた。北部の大都市やヨークシャーの中小都市、スコットランドの大都市ですら、各職工講習所の教科内容と運営は異なっていた。

1830年代には、成功したロンドンの職工講習所のケースは別として、全国的に普及したこの講習組織の多くは転換期を迎えていた。一方で、この運動は世界に広がり、アメリカ、カナダで特に強い影響を与えていた。アメリカ合衆国では1825年にボストン、1827年にボルティモアで、カナダでは、ハミルトン、ケベック、トロントに「職工講習所」が出来ていた。ヨーロッパではフランスが特にこの種の講習所を普及させており、グラスゴウのパークベックのクラスに感銘を受けたシャルル・デュパン(Charles Dupin)は1824年から1825年にかけて59校の施設を作った。その他では、1831年にペテルブルグ、1833年にシドニー、1837年に広東、1839年にはカルカッタでも出発していた²⁷⁾。

精力的なパークベックが「職工講習所」の設立運動と同時に熱心に取り組んでいた計画の一つにロンドン大学の創設がある。1826年にユニヴァーシティ・カレッジとして実現したこの高

等教育機関は、親友ブルームの誘いでもあったが「オックス・ブリッジ」という体制側の大学に対抗すべき教育施設の設立でもあった。パークベックとしては、職工たちの基礎教育の上に立つ、高等教育の組織が必要だったのである。彼は1825年には暫定理事会の委員となっており、計画の達成に積極的であった。特に彼が推進したのは、医学部とその病院の設立であった。医学部は1828年に同大最初の学部として開設され、病院は1835年に実現していた。

VII 晩年

1830年代の後半、パークベックは病気を繰り返すようになった。しかしながら、彼は「有用知識普及協会」の支援を受け、国内各地の「職工講習所」を結成する企画に乗り出していた。1830年代の末には、さらに新たないくつかの組織に関与していた。そのうちの最大のが「ポーランド相互教育協会」であった。1830年に祖国の独立を失い、イギリスに亡命していた多数のポーランド人に対するパークベックの想いは、この協会のために「ロンドン職工講習所」の施設を無料で使わせるとともに、資金援助もしていたところに表れていた²⁸⁾。彼は気の毒な境遇の人たちを見捨てなかった。彼はさらに、1838年にはロンドンの「コーヒーハウス店主会」にも関与していた。コーヒーハウスが新聞・雑誌の提供により民衆の読書を支援しているとの理解からであった²⁹⁾。

1841年12月1日にジョージ・パークベックはロンドンの自宅で亡くなった。最後まで意識ははっきりしており、前日には娘にロンドン職工講習所の職員への伝言を筆記させていた。「貴施設の記念日にもう一度出席したかったのですが、この度はできません。式典のプログラムを拝見しましたが、素晴らしい夕べとなることでしょう」。葬儀は13日にケンサル・グリーン墓地で行われた。彼は「講習所」の運営といくつもの慈善事業への寄付により、死去したさいに遺産は、ほとんど残さなかった。子どもたち

はすでに成人していたが、未亡人は暮らしに困るほどであったという。故人の友人ヘンリー・ブルームは、再び支援の手を差し伸べ、年金の交渉を引き受けていた³⁰⁾。多彩かつ重要な社会活動を展開しながらも、パークベックは医師としての半生を貫いた。自身が必ずしも健康ではなかったが、彼は医師としての任は放棄せず、医学協会会長を含む多くの公職、および、各地の講習所の顧問を兼務した。このような精力的な活動は、パークベックの伝記作家も説明に苦しむほどであった。おそらく、クエーカー教徒としての社会的責任への義務感からであったのだろう。

パークベックについて、『自助論』の作者サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) は次のように書いている、「奴隷解放に対してクラークソン (Thomas Clarkson) が、郵便制度についてヒル (Rowland Hill) が、自由貿易に対してコブデン (Richard Cobden) が成し遂げたことを、パークベックは成人教育の普及という点で行った。彼はこの問題をかなり前進させ、弾みをつけ、事業として民衆の前に示してみせた³¹⁾」。

パークベックの死後、ロンドン職工講習所は次第に繁栄を失ったが、1867年にはパークベック文芸科学学院 (Birkbeck Literary and Scientific Institution) として復活し、そこは



図1 現在のパークベック・カレッジ
(SOAS (東洋アフリカ研究学院) に隣接)
[筆者撮影]

1907年にパークベック・カレッジとなり、1920年にはロンドン大学の一部となった³²⁾。技術教育の伝統は、第二次世界大戦後、各地のポリテクニクの設立によって復活していった。パークベックの銅像や肖像画は多数あり、その多くは、彼の所縁の場所に掲げてある。彼の名を冠した施設も多数あった。ロンドン大学のパークベック・カレッジ (図1 参照) には、現在も多数の学生が通っている。

本稿は、2011年3月、放送大学大学院に提出した論文「ジョージ・パークベックの職工講習所: その社会的・思想的背景」を全面的に改稿し、人物研究の視点からまとめたものである。

注・引用文献

- 1) Mechanics' Institute, 或いは, Mechanics' Institution の訳語には「職工学校」「職工講習所」があるが、ここは「学校」というよりは、職人向けの技術教育を推進した「実践的な教育施設」であるため、この施設の特徴 (特に出発時の方向) を鑑み、「学校」よりもその意味合いが強い「講習所」という言葉をここでは採用している。
- 2) Birkbeck, R., *The Birkbecks of Westmorland and their Descendants*, 1900, quoted in Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, Liverpool: Liverpool University Press, 1957, p.2.
- 3) イギリスの産業革命についての文献は多い。例えば、次のような文献がある。Ashton, Thomas S., *The Industrial Revolution, 1760-1830*, New York: Greenwood Press, 1964, 119p.; Faler, P. G., *Mechanics and Manufacturers in the Early Industrial Revolution*, New York: State University of New York Press, 1901, 267p.
- 4) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, Liverpool: Liverpool University Press, 1957, p.4.
- 5) Friends World Committee for Consultation, *Handbook of the Religious Society of Friends*, 5th ed., London, 1967.
- 6) Catford, E. F., *Edinburgh: The Story of a City*, London: Hutchinson, 1975, 287p.
- 7) Grant, A., *The Story of Edinburgh University*, London, 1884, vol.2, pp.395-397.
- 8) Lockhart, J. G., *Peter's Letters to Hid Kinfolk*, London: Longmans, 1819, letter 13, quoted in Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., p.13.
- 9) ブルームについては何冊かの本が書かれてい

るが、伝記として詳細なものに、Trowbridge, H. Ford, *Henry Brougham and His World: A Biography*, Chichester: Barry Rose, 1995, 543p. がある。

- 10) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., p.13.
- 11) Muir, J., *John Anderson: Pioneer of Technical Education and the College He Founded*, Glasgow: Glasgow University, 1950, pp.29-40.
- 12) *The International Geographic Encyclopedia and Atlas*, London: Macmillan Press, 1979, p.279.
- 13) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., pp.20-21.
- 14) *Ibid.*, p.25.
- 15) Kelly, Thomas, *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool: Liverpool University Press, 1970, p.103, 118.
- 16) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., p.36.
- 17) *Ibid.*, p.40.
- 18) Lloyd, S., *The Lloyds of Birmingham*, Birmingham, 1907, p.60.
- 19) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., p.47.
- 20) London Mechanics' Institution, *Minutes*, 1, 15 December 1923, quoted in Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., pp.88-89.
- 21) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., p.82.
- 22) *Mechanics Magazine*, 1, Supplement, 13 March 1824.
- 23) London Mechanics' Institution, *Minutes*, 1, 19 September 1825.
- 24) Trowbridge, H. Ford, *Henry Brougham and His World*, Chichester: Barry Rose, 1995, p.494.
- 25) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., pp.120-121.
- 26) Altick, Richard D., *The English Common Reader*, 2nd ed., Ohio: Ohio State University, 1998, p.191.
- 27) Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., pp.254-256.
- 28) *Ibid.*, p.193.
- 29) *Ibid.*, pp.194-195.
- 30) *Ibid.*, p.198.
- 31) Samuel Smiles, quoted in Kelly, Thomas, *George Birkbeck*, op. cit., preface.
- 32) Burns, Delius, *A Short History of Birkbeck College: University of London*, London: University of London Press, 1924, 169p.

参考文献

- Black, Alistair, *A New History of the English Public Library: Social and Intellectual Contexts, 1850-1914*, London: Leicester University Press, 1996, 353p.
- Hoare, Peter. ed., *The Cambridge History of Libraries in Britain and Ireland*, Volume II and III, Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Kelly, Thomas, *A History of Public Libraries in Great Britain, 1845-1975*, 2nd ed., London: Library Association, 1977, 582p.
- Kelly, Thomas, *Early Public Libraries: A History of Public Libraries in Great Britain before 1850*, London: Library Association, 1966, 281p.
- Munford, William, *Penny Rate: Aspects of British Public Library History 1850-1950*, London: Library Association, 1951, 206p. (藤野寛之訳『ペニー・レート』金沢文庫閣, 2007年, 総207ページ。)
- Munford, William, *William Ewart, M. P. 1798-1869: Portrait of a Radical*, London: Grafton, 1960, 207p.
- Oldman, C. B. et al., *English Libraries, 1800-1850: Three Lectures Delivered at University College London*, London: Lewis, 1958, 78p.
- Tylecote, Mabel, *The Mechanics' Institute Movement in Lancashire and Yorkshire before 1851*, Manchester: Manchester University Press, 1957, 346p.
- Wormland, Jenny. ed., *Scotland: A History*, Oxford: Oxford University Press, 2005, 364p.
- マイケル・D.ステューヴンス著, 渡邊洋子訳『イギリス成人教育の展開』明石書店, 2000年, 総214ページ。
- サミュエル・スマイルズ著, 竹内均訳『自助論』三笠書房, 2002年, 総296ページ。
- ジョン・ローソン, ハロルド・シルバー著, 北斗・研究サークル訳『イギリス教育社会史』学文社, 2007年, 総568ページ。

(2024年11月15日掲載決定)